

死ぬ日まで天を仰ぎ

同志社大学副学長
同志社大学社会学部教授
木原 活信

生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができますように。

(詩編 90 編 12 節)

はじめに

このたび亡くなられた同志社に関わる方々の地上でのご労苦を偲び、深い感謝を捧げますとともに、残されたご遺族のうえに神さまの豊かな慰めがありますよう、心よりお祈り申し上げます。本日の追悼礼拝は、亡き方の霊を慰め成仏を願う仏式の「法要」とは趣を異にするものです。この場合は、亡くなられたお一人お一人の生前の歩みを偲び、その日々を改めて心に刻み、記憶し、記念し、追悼するための時です。それは、ご遺族、ご友人、関係者の方々にとって慰めの時であると同時に、同志社に連なる私たち一人ひとりがその悲しみに心を寄せ、共に涙を流す機会でもあります。

そして今、ここに集った私たちが、死という誰も避けることのできない現実を真正面から受け止め、その事実と向き合いながら、「今」生かされている命の重みと意味を改めて深く考え、故人を偲びつつ、いかに意義深く生きるべきかを見つめ直す、そんなひとときとなることを願っています。

メメント・モリ

冒頭に読まれた詩篇 90 篇 12 節には、こうあります。「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができますように。」この聖句は、私たちの命には限りがあるという事実を受け入れ、それを自覚しながら、知恵ある心をもって日々を大切に生きるようにと語りかけています。

しかし私たちは、この「命の有限性」に対し、ときに無意識のうちに目を背け、深く考えることを避けがちです。そうした私たちへの戒めとして、中世の修道院で語り継がれてきた言葉に「メメント・モリ」があります。「死を思え」「死を忘れるな」という意味を持つこの言葉は、限りある命を真摯に見つめ、日々を誠実に生きるよう促すものです。

本日のこの時、私たちは改めて「生涯の日を正しく数える」ことを学び、敢えて「死を思う」姿勢を心に刻みたいと思います。

死の三つの人称

死には、「一人称の死」「二人称の死」「三人称の死」という、捉え方の違いがあります。「一人称の死」は「私自身の死」、「二人称の死」は親しい「あなたの死」、つまり近しい人の死です。そして「三人称の死」は、自分とは直接の関わりのない他者の死を指します。

本日の追悼礼拝は、同志社に関わりをもってこられた方々の死を悼むものですが、一見すると、ここに集う多くの方にとっては「三人称の死」と映るかもしれません。しかし私たちは、その死を「他人事」とせず、心を寄せる「二人称の死」として受け止め、共にその方々を偲び、祈りを捧げたいと願っています。これは、新島襄が願った同志社の共同体のあるべき姿でもあると信じています。

もちろん、ご遺族にとっては、まさに親しい「あなた」を失った「二人称の死」であり、その悲しみと痛みは、言葉では言い尽くせないほど深いものでしょう。私たちは今日この時、その深い悲しみに寄り添い、ともにその重みを分かち合いたいと願っています。

「TAKARAMONO」の歌

私自身にとっても、今年 1 月に届いた一報が胸に迫りました。私の所属する社会福祉学科を 7 年前に卒業した吉村和馬さんの訃報です。これはまさに、私にとっての「二人称の死」でした。

彼は進行性の筋ジストロフィーという難病を抱えながらも、電動車椅子や介助犬とともに、同志社での学びをクリスチャンとして力強く全うしました。29 年の短い生涯でしたが、その生き様は、私たちに多くのことを教えてくれました。高校時代に彼が作詞・作曲した「TAKARAMONO」という CD が、関係者から私のもとに届けられました。その歌詞には、「病気と知ってショックだったよ。でも今では僕の大切な宝物。病気は早く治ってほしいけど、筋ジスは僕のトロフィーなんだ」という一節がありました。曲の最後は「ありがとう」という言葉の繰り返しで締めくくられています。そのメッセージと溢れる感謝の心に、在りし日の彼の姿が重なり、私は深く心を打たれました。

「死ぬ日まで天を仰ぎ」―尹東柱の死の意味―

もう一人、私にとって新たに「二人称の死」として迫ってきた存在がいます。それは、韓国のクリスチャン詩人、尹東柱（ユン・ドンジュ）です。彼は 1942 年、立教大学から同志社大学へ転入し、英文学を学びながらハングルで詩作を続けました。ところが戦時下の 1943 年、「悪法」である治安維持法違反とされ、思想犯として京都の下鴨警察署に連行され、逮捕されたのち福岡刑務所で獄死しました。1945 年 2 月 16 日、わずか 27 歳でした。

当時の同志社大学として、この留学生を守れなかったことは、誠に残念でなりません。これは帝国主義体制下における痛ましい出来事であり、同志社の 150 年の歴史における「負の遺産」として、敢えて表に出し、私たちは記憶し、二度と同じ過ちを繰り返してはならないと心に刻むべきです。

彼の死後、詩集『空と風と星と詩』が出版されました。その作品は芸術性が高く評価され、現在では韓国の教科書にも掲載されるほどの国民的詩人として広く知られています。彼の詩は世界中で翻訳され、同志社大学も 1995 年に詩碑の建立に協力しました。

2025 年は、同志社 150 周年、日韓国交正常化 60 年、尹東柱没後 80 年、詩碑建立 30 周年にあたります。この節目の年に、同志社大学は極めて例外的な判断として、名誉文化博士号を贈呈しました。今年 2 月 16 日、その贈呈式が行われ、甥の尹仁石（ユン・インソク）様に小原学長から学位が贈呈されました。この瞬間に立ち会えたことは、私にとっても感動的な出来事でした。

追悼会では、詩人が生前に愛唱していた讃美歌「いつくしみ深き」が日本語とハングルで歌われ

ました。甥の仁石さんが事前に教えてくださった愛唱歌です。その中の「世の友我らを捨て去るときも、祈りに応えていたわりたまわん」という歌詞を歌っているとき、私は一度も会ったことのないはずの尹東柱に出会えたような、不思議な感覚に包まれました。

ここで、彼の代表的な詩の一節をご紹介します。

死ぬ日まで天を仰ぎ
一点の恥じ入ることないことを、
葉あいにおきる風にさえ
私は思い煩った。
星を歌う心で
すべての絶え入るものをいとおしまねば
そして私に与えられた道を
歩いてゆかねば。
今夜も星が 風にかすれて泣いている。

『序詩』1941年11月20日 金時鐘訳(岩波文庫『尹東柱詩集 空と風と星と詩』2012年、9頁)

彼はすでにこの地上にはいませんが、その詩は今も生きています。詩人の言葉は生きており、それを通して人々の心に響き、日韓の架け橋となっています。彼が「死ぬ日まで天を仰ぎ」ながら、獄中で流した涙は、私たちの中に今も息づいているのです。

復活の希望

最後に、復活の希望について触れたいと思います。聖書は、イエス・キリストが十字架で死なれ、三日目に復活されたことを明確に伝えています。これは、死が終わりではなく、その先に命のよみがえりがあることを証しています。

イエスご自身が「わたしは復活であり、命である」(ヨハネ 11:25)と語られたように、復活こそが私たちの信仰の根幹であり、真の希望です。死は誰にとっても最大の悲しみであり、不安であり、恐れでもあります。しかし聖書は、その死の向こうにも喜びと希望があると語ります。

本日この後に共に賛美する讃美歌「球根の中には」の一節、「いのちの終わりは、いのちの始め…その日、その時を、ただ神が知る」という歌詞が示すとおり、死は私たちの目には不条理に見えるかもしれませんが、しかしその向こうにも、神のご計画と希望があると信じるのが大切です。「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます」(Ⅱコリント 4:18)というパウロの言葉のように、私たちは、目に見える現実だけにとらわれず、「見えないもの」に目を注ぐ信仰のまなざしを持ちたいのです。それこそが、私たちが死を越えて、まことの希望へと導くのではないのでしょうか。

祈り

命の源であられます、私たちの主なる神様。

本日の追悼礼拝を導き、祝福してくださったことを心より感謝いたします。

どうか私たちが「生涯の日を正しく数える」ことを学び、与えられた命の尊さを深く覚える者とならせてください。

いま、愛する者を失ったご遺族の上に、あなたの深い慰めと平安が豊かに注がれますように。ここに集った私たち一人ひとりが、主イエスの十字架と復活に目を向け、命に感謝し、希望をもって歩むことができますように。

この祈りを、私たちの救い主、主イエス・キリストの御名によってお捧げいたします。

アーメン。